

黒川幸雄, 他(シリーズ編集)
井上 保・鶴見隆正(責任編集)

「理学療法 MOOK15 子どもの理学療法」

山本博子

熊本リハビリテーション学院理学療法学科

障がいを持った子どものリハビリテーションは、高木憲次博士の提唱するいわゆる療育思想をベースに、その時々、社会的影響を受けながら繰り広げられてきた。「療育」とは、本書に述べられているとおり治療と育成(教育)を意味するが、その「療」の部分において主体的に関わる理学療法士の方、方向性や役割もその時代のニーズに応えながら変化してきた。

今日においては、国際障害分類(ICIDH)から国際生活機能分類(ICF)へのパラダイムの移行に伴う視点の転換、また地域療育体制の整備による入所施設療育から在宅通所療育への転換などといった時代の流れのなか、子どものリハビリテーションにおいてもこれまでの障害・疾病モデルではなく、生活モデルを基盤とした理学療法の介入がさらに強く求められるようになってきた。理学療法士は、子どもがどのような環境のもと生活しているのか、その子どもや家族が今なにを必要としているのかを考え、理学療法を組み立てていくことが必要である。そして、子ども本人の能力を改善するとともに、周辺課題の解決と環境の調整を図りながら、子どもの生活に密着した理学療法を実践していかなければならない。そのためには、子どもに関する

確かな知識や技術はもとより、地域社会のなかで障がいを持つ子どもを支援する療育の考え方やシステムを理解しておくことも必要となる。

本書は、「地域療育システムの広がりに伴い、これまで以上に医療機関で理学療法が行われるようになってきた現状から、(中略)医療機関でも活用できるように」との明確な意図の下に編纂され、その意図が見事に具現化されている。

子どもが抱える問題を見つけ出すための評価ならびにその問題を解決していくための治療アプローチが具体的に述べられており、より実践的な内容となっている。また、ライフステージに沿った理学療法の進め方、発達支援・子育て支援など、広く地域療育システムについて解説されており、理学療法を展開していく上で必要な情報が随所に盛り込まれている。なかでも長年子どもに携わってこられた責任編集者である井上保先生の手による肢体不自由児療育の変遷は、私自身、改めて療育の理念を再考させられるものであった。「療育とはなにか」、「理学療法士がなすべきこととは」を原点に立ち返り考えさせてもらった。

卒後3年といわず、小児理学療法に関わる多くの理学療法士が常に座右に置き、親しく本書を手にとられるよう強くお勧めするところである。

●B5判・260頁

定価 4,410 円(本体 4,200 円+税 5%)

2008 年 三輪書店・刊